

森と湖のまつり

武田 泰淳



森と湖の

まつり

武田
泰淳

森と湖のまつり

昭和三十三年六月二十五日 発行

昭和三十三年九月十五日 七刷

定価 三七〇円

地方
売価 三八〇円

著者 武田 泰淳

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(34)代表七一一九番

振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・二光印刷株式会社 製本 新宿加藤製本所

Printed in Japan

森と湖のまつり

阿寒の湖は、陸地からの眺めは平凡で、青い水面のひろがりにすぎない。バスの発着所のあたりに立ち並ぶ土産物の店、湖にのぞむ旅館のつくりも、いかにも遊覧地向きで、古く重々しい湖水の風情にはそぐわない。もう夏も終りだった。夏期二カ月ほど稼ぎためて、山を下る人々は、客を迎える態度もいそがしげである。

折からの日曜日で、まひるどきの湖畔の一角だけ、まばらに客が群れていた。アイヌ民芸品を陳列した、小さな博物館風の建物、やがて射殺せねばならぬほど成長し切った熊を入れた檻、それらすべての光景は、どことなくけだるそうで、投げやりに見えた。太い丸木で組んだ檻の中で、熊たちは、すっかりかさばってしまった自分たちのからだをもてあましている。彼らは、太い横木のわずかなすきまから、自分たちに向けられるカメラを、横眼でながめながら、ゆきつもどりつした。やり場のない精力のため、熊の

眼は黒い剛毛のあいだに、小さくちぢかまっていた。さして鋭くもない、その小さな眼が、かえって血走っているような感じをあたえた。

土産物を売る店のうち、三軒ほど、特に人眼をひく場所に坐って、アイヌの男が斧を振っていた。熊の毛をおもわせるほど、頭髮は黒かった。半ズボンだけで、上半身は裸の青年もいた。純白のランニングシャツを着けた、中年男もいた。赤銅色より、もう少し黒ずんだ皮膚をしていた。その色だけでは、寒い北方の人種と言うよりは、むしろ、南方熱帯の住民に似ていた。

輪切りにされた木の幹からは、勢いよく木ツバがとんだ。斧はたてつづけに、無造作に打ち下ろされた。あぐらをかいた男の傍には、同じ型の木彫りの熊が、いくつも積んであった。広告用に坐らされるだけあって、腕はたしかだし、姿勢にも自信が見えた。

彼らはもちろん、ニコリともしなかった。熱心でもあり、きまじめでもある表情は、ほとんど動かない。眉は太く、まつげは長く、両眼には深みがある。むき出して憂愁や反感が漂っているわけではなかった。沈鬱ではあるが、それがおとなしく隠れていた。

彼らは、客を見つめることもしないし、客から視線をそ

らしもしなかった。店番の女たちと、話を交わしもしない。ただ時たま、別の店でやはり客よせに備われている、アイヌの老婆の方を、それとなく眺めやった。

見物されるために備われている、それが定職になっている。コタンでの労働にくらべれば楽な仕事だった。それにしても、あきらめや恥しさは、まだ消えやらず残っているにちがひなかった。

尊敬すべきアイヌ族の代表として、店先に坐っているのではない。アイヌの標品として、純血なところを買われているわけだった。見物人も標品を見て、阿寒まで来たかいたがあったと満足するのだ。

老婆は、玩具のような首飾りを下げていた。青い石の玉は大きすぎて、精巧なつくりではなかった。石の色はガラス球に青インキをにじませたように、深みがなかった。つらねた玉の数はかなり多いから、見ばえのせぬわりに、ひどく重い飾りである。

彼女は、あつくるしそうにアツシを着こんでいた。九月のはじめでも山は冷えるから、厚地のアツシでもよいわけだった。それが暑苦しげに見えるのは、老女の立っている場所のせいであった。竹やあけびの細工物、木の根でこしらえたパイプ、山や湖の写真を染め出したビニールの布、

絵葉書や鏡など、どれも赤や青の原色で塗られるか、ニスでピカピカ光っていた。いろいろの土産物のにぎやかな色どりのなかでは、垢づいたアツシは、どうしても、わざとらしくムリに見えた。

老婆は、ほかの店で働く同族の男たちのように、緊張してはいなかった。男たちが彼女の方をときたまチラリと眺めても、彼女の方は男たちを見ようとはしなかった。

鎖でつながれた熊の子が、老婆にじやれついた。老婆など、わけなく押し倒せるぐらい大きな子熊だった。老婆は気楽に、熊の口の中へ指を入れたり、乱暴に首環をひっぱったりした。熊は桃色の歯ぐきと白い歯をむき出し、爪でアツシをひつかく。そして、ころげ廻ってあばれた。

客が子熊にカメラを向けると、老婆は撮りいいように、熊の首をそちらへ向けてやった。注文によつては、子熊を抱きかかえて、自分もカメラの前に立った。そんなイソイソとくつたくのない、老婆のサアビス振りを、無言で斧を振っているアイヌの若者たちが、気づかわしげに眺めやる。そのため、土産物店ではさまれた、その観光用道路には、一般の見物人には気づかれぬ視線の網が張られてあるわけだった。

その網を突っ切るようにして、池博士と雪子は歩いて行

った。もつとも、突っ切るようにしてと言つても、それは敏感な博士の方だけが感じとただけであつて、雪子の方は、それを感じている博士の、するどすぎる神経を感じとただけであつたが。

「おばあさん、今日は」と、池博士は老婆に挨拶した。

「いつも元気で結構だね」

老婆はそう言われても、この長身で痩せがたの学者が誰であるか、急には気がつかなかつた。むしろなれなれし過ぎる紳士を、いぶかしがる様子だつた。老婆はかえつて、カンバスと絵の具箱を手にした雪子の姿を認めてから、博士が有名なアイヌ研究者であることを思い出した。二人が連れ立って阿寒へ来たのは、これで二度日だつたからだ。

青いれずみでふちどられた、老婆の口がわずかにひらいた。赤銅色の皮膚と、顔一面の皺のため、いれずみの色はうすれていた。少し笑っているためか、唇をふちどるそのうす青い色が、雪子にはなまめかしく見えた。

「ああ、先生か」老婆は腰をのばして池博士を見つめた。それから、弱々しく、親しげに雪子の方へ眼いろで挨拶した。

「エカシ（長老）はいるかね」と、専門家らしく博士はたずねた。

「ああ、いるとも」

「元氣かね」

「ああ、元氣ださ」

「あいかわらずカムイノミ（神酒を飲んで祈ること）やつてるか」

「ああ、やつてるとも」老婆は池の口調とは、まるでちがつた、沈んだゆるいテンポで答えたのち、割に明るく笑つた。それは物好きなシャモ（和人）のお客さんを相手にするときの、調子を合わせた笑いだつた。

「カムイ（神）のことは、ほつたらかしにして、酒ばっか飲んでるさ」

「ウタリ（アイヌ仲間）にとっては大切なひとだからな。元氣でいてくれなくちゃ」

「あにが大切なひとだか」老婆はいくらか皮肉な、意地わるい口つきをした。

「エカシも年をとつちまつちや、もうはあダメさ。酒ばっか食らつて、何もできやしねえだからよ」

「何もできなくてもいいさ。生きてるだけで大切なんだよ。おばあさんだって、そうなんだよ」

「誰がばあさまなんか、かまってくれるかさ。ピリカメノコ（きれいな女の子）なら、シャモも、寄ってくるなつて

言つたつて寄つてくるわさ」老婆は首をかたくなに傾けて、シロリと雪子を見やつた。

「おばあさんだつて、昔はピリカメノコだつたんじやない。わたし、おばあさんの顔つき、好きだな」お世辞でもなく、なぐさめるためでもなく、雪子は言つた。

「ふうん、そうけえ、昔は昔、今は今さ。……ま、ええわさ、エカシに会つていつてやりな。喜ぶわさ、きつと。向うの店にいるからな」

老婆は店並のはずれの茶店の方を、首つきと指さきで示した。

藤棚の影が落ちてゐる下に、板の腰かけを並べた茶店だつた。アイヌの盛装をした老爺が、遊覧客の一人と向ひあわせに、腰をおろしてゐた。長い腰かけには焼酎ビンが二本、コップが二つ置かれ、老人はすでに熟柿の色を發してゐた。相手の客は、瘦せて貧相な中年の小男だつた。くたびれたズボンに、ちびた下駄をはいてゐる。しっかりと定職もなし、根強い生活力もなしといった男に見えた。両膝に両手をつっぱつて、アツシの肩を怒らせた老人にくらべ、その男のうす髭の生えた口もとや、そそけた頬は、いかにも弱々しかった。

「俺はもういい、あんた飲みなさい。俺はもういいから」

老人は客のすすめを断りながら、愉快そうにあたりを見廻した。

たしかに、氷水やサイダアを飲んでゐるお客たちの誰よりも、酔つたアイヌ長老は愉快そうだつた。腰にさげたアイヌ刀の鞘をひきよせたり、やや黄ばんだ白髯をしごきながら、老人の目やにのたまつた両眼は、愛想よく、客たちの氣分に溶けこむように、輝いてゐたのだ。

「俺はもう沢山ごちそうになつた。あんた飲めよ」

客がくすぐつたい笑いをうかべてすすめるコップを、老人は一度、手で払いのけた。そしてまた、手をのばそうとしたとき、茶店に入つて来る池博士の姿に気づいたのである。

「ああ、先生か」老人の眼はたちまちくもり、用心ぶかくなつた。わるい所を見つかつた悪童のように、鼻白んだ。

「まあいいからさ。残しておいたつて仕様がな」老人の氣分の急変に気づかずに、中年の客はまだしつこく、酒をすすめた。

「エカシ、飲んでるな」

博士が老人のすぐ傍に坐ると、老人は少し腰をすらしめた。

「う、うん。よく来なすつた」老人は、具合わるそうに言

った。

「飲みなさいよ。飲んだって叱らないから飲みなさいよ」と、池は言った。

「ともかく、この連中は酒が好きですからね」中年の客は、雪子の方へ話しかけた。「酒となったら、日がないんですから」

老人は雪子の顔を見ると、気まずさを忘れてなつかしうに挨拶した。アイヌたちは一度会っただけで、不思議と雪子の顔をおぼえていた。

「去年もあんだ、先生と一緒に来なすったね」

「そうよ。おぼえていた？」

「おぼえていたともさ」

雪子は、酒に酔ったアイヌ翁の血色が好きだった。それは、赭顔、赭顔と二回つづけて形容したくなるような、底のふかい赤銅色だった。アイヌと親しいらしい学者と女画家をめずらしがって、大学生が別の腰かけから起って、こちらへ来た。

中年男は、自分がひとり占めにしていた玩具を他人に横取りされたのが、不満らしかった。

「学生さん、あんだ写真、撮りたいなら、この爺さん写していった方がいいよ。遠慮はいらないよ」彼は大学生に、

なれなれしく言った。

「……そうですか、勝手に写してかまいませんかねえ」制服の大学生は、カメラを手にしたまま遠慮していた。

「かまわないともさ。爺さんは写されるのが好きなんだから」

「写真とるかね。とりなさい。いい記念になるからな」老人はすぐさま片膝を起しかけて、もとへもどした。和人のカメラに入って、生きた「雄姿」を残したがっている自分の胸中を、博士に見抜かれるのが厭だったのだ。

「それじゃ写させてもらうかな」と、学生は言った。

「いいとも。どうする？ あんたが俺と並んで写すかね」

老人は、博士の注視をふりはらうようにして、アイヌ刀の鞘を鳴らし、アツシの腰をすりあげた。「そうなら、このひとに撮ってもらって、あんだは俺と一緒に並べばいい」老人が往来へ出ると、学生もそれにつづいた。酔いのためか老衰のためか、老人の足つきはこころもとなかった。額には汗の粒がふき出している。

大学生は、老人の正面や横側から、二三回シャッターを切った。次にカメラを中年男に渡して、自分は老人の肩に腕をかけた。その種のボオズに慣れ切っている老人は、学生よりはるかに低くガツリした身体を、遠慮がちな学生

の身体に寄せかけ、押しつけた。

茶店の腰かけにもどると、老人は性急に、大学生の住所姓名をたずねた。また、アツシの内ぶところを探り、大事そうに取出した名刺を学生の掌に握らせた。

「ここだからな。まちがえないように写真送ってくれよな」

老人は、学生が走り書きして呉れた紙片の文字を、注意ぶかく読みたどった。

「学生さんはいいよ。学生さんは嘘は言わないからな」
くどいほど念を押すとき、老人の赤ぐろい咽喉もとは、苦しげな呼吸音をさせた。

雪子は老人の脱いだ、冠^{かぶ}り物を手にとった。幅のひろい鉢巻に似て、頭部を飾る儀式用の冠り物は、木の皮か草の茎で編まれてあった。「かぶって見なさい」と老人は、すすめた。彩色のない冠り物は、軽く乾いていた。その簡単な細工物を頭にはめると、老人の汗の匂いが、彼女の眉のあたりへ重く降りて来た。

「ああ、そりゃ前と後がちがっている」

老人の骨太い指が、雪子の頭上から冠り物を持ちあげ、その向きをかえた。老人の指は垢づいて、爪はひしゃげていた。手の甲には長い毛が、汗に濡れていた。肉の厚い掌

のひらが、雪子の頭髮の両側に廻り、耳たぶにふれた。古い冠り物の編み目が、かすかにきしんだ。なかば開いた老人の口をもれる息と、皺のふかい首すじや胸元にこもった体温が、雪子の鼻さきを包んだ。夏の陽のきらめきが消えた。

それは湖上を通過する雲の棚のはしが、日輪を隠したためだった。だが雪子には、老アイヌの影がいきなりひろがり、あたりを暗くしたように思われた。

「このおやじさん、別に儲われているわけじゃないのにな。自発的にやってくるんだからな」中年の小男は、からかうように言った。

「見られるのが嬉しいんだな。見物されるのがな。だから頼まれもしないのに、好きこのんで部落からやって来るんだな」

「だってそうじゃないか。俺が死ねば、もうお客さんだち、ほんもののアイヌは見られなくなるからな」

老人は息を荒くしたが、さして小男のことに腹を立てた様子でもなかった。

「ほんもののアイヌはなくならないよ」と、博士が静かに言った。

「なくなるさ。どうしたってなくなるさ」

老人はふるえる手で、またコップをとりあげた。

「今のままだったら、なくなるよ。老人が酒ばっかり飲んで、若い者がアイヌであるのを厭がっているような、今のままなら、なくなるよ」

ああ、また始まった、池さんはどうして、こんな言葉で、老人を厭がらせ困らせなければならぬのだろうか、と雪子と思う。博士は純粹だった。雪子の眼から見ても不可能としか写らない目的のために、彼は自分の一生を賭けたのだ。彼が子供じみて物ごとに熱中すること、徹底して迷わないこと、そこが彼女は好きだった。だが池さんも、彼の「委員会」も、失敗し消え去るだろう。

「今のままだったら、うまくねえわさ。先生の言う通りだわさ。そんなこと知ってるさ。言われねえでも知ってるさ。だけど俺たちは酒を飲むし、若い者はアイヌであるのを厭がるのさ。だから、ほんもののアイヌは、どうしたってなくなるんさ。もう誰も、止めることはできねえよ」

「なくなつて、いいのかね」

「いいにも悪いにも……」老人は、はげしい呼吸音で咽喉を鳴らしながら、赤茶けた手拭で額の汗をぬぐった。

「もう今だって、ほんもののアイヌは一人もいやしねえよ。俺だったって、昔のほんもののアイヌじゃないんだか

らよ」

「塩見さん、怒らないでくれよ。僕は何もあんたを責めてるわけじゃないんだからね」

「うん、怒りやしねえよ。先生と俺のあいだがらじゃ、怒りたくても怒れねえわさ。池さんなんか、俺から見れば、子供みたいな男だしな」

老人は、しゃがれた笑声を立てた。そしてあぐらの膝を持ち上げるようにして、上半身を少しそらした。それはチャランケ（談論）のうまいアイヌの古老が、どんな深刻な問題を話すさいにも忘れない、一つのユウモアであった。戦術でもあった。

「だけど怒りたくなるときもあるよ。全くおかしかったり、腹が立つたりすることはあるもんさ」老人は次第にまた、上機嫌になりはじめた。

「三日ばかり前に、俺んところへ、東京から女の学生が訪ねて来たんだ。可愛い顔した女の大学生だよ。そいつが『エカシ』なんて俺のことおだてあげたりするから、俺もいい気持になつて出て行つたわさな。『何の用件だい』ってきくと、その可愛い娘ツ子がな。『アイヌの育成につきてきまして、エカシの御意見を伺いたい』って言うんだ。イクセイだつてな。イクセイって言うのはお前さん……」

中年男が調子を合せるように笑った。老人はその男の方を、うるさげに睨んだ。

「育成って、それは豚や羊やなんか育てることだべ。いくら東京からわざわざ出向いて来たつてもな。イクセイじゃ話にならねえからな。どやしつけてやったさ。」

「困るね、全く。そう言うのは困るよ」と、博士はきまじめに言った。

「困りゃしねえけどな。だけど娘っ子ばっかじゃねえよ。

学者なんて言たって、いいかげんなのがいるさ。池さんは、これはまあいいけどな。おかしなのがいるよ。このあいだ、札幌の学者が雑誌を送って来たんだ。名前は言わねえがね。その雑誌に奴の論文が載ってたのさ。俺ん所へ来て、半日がかりで聴き出していったことを、そっくりそのまま長々と書いた論文だわさ。送って来たのはいいさ、送らないよりはね。俺は論文なんか面白くねえから、よくは読まなかった。だけど俺が喋ったことだからな。俺の名がどこかへ出てゐるかと思つて、そればっか探したさ。それがなかなか見つからねえんだよ。ずうっと読んで行くとした

いの方に、有るには有ったよ。塩見^{げん}言てな、論文より小さい活字でな、たった一つ書いてあったさ。シオミ^{げん}言てな。シオミというのは俺の名よ。ゲンというのは、シオミが喋

ったという意味だべさ。シオミゲン、うめえこと言うものさな。ゲンとはな、ちつこいちつこい字でな。ゲンとしてあったさ。シオミゲンよ。な、うめえこと書いたもんよ」
老人はますます愉快そうに哄笑したが、博士は暗くおし黙っていた。

その学者の話はひとごとではなかった。研究者と研究される対象、日本人のアイヌ学者とアイヌの民衆、そのあいだにはどうしても埋めることのできない溝があるのだ。研究者が良心的になればなるほど、その溝ははっきりと見えて来るのだ。

遊覧船の発着所で、ベルが鳴り渡った。天然記念物として名高い、マリモを見物させる船だった。博士と雪子は、その船で、もう何回日かの湖上巡りをやる予定だった。

「風森はこのごろ、こつちへ来たかね」ややかつい調子で、博士はたずねた。

「風森って、息子の方かね。見ないな。あいつ何をやってゐるのかな。だつて風森は、先生の仲間じゃねえのかよ。先生、あいつがどこにゐるのか知らねえのけえ」

「それで心配してゐるのさ」

「風のように好きな所、歩きまわる男だからな。奴は今じや委員会の大物なんじゃないのけえ。それで先生に居所を

知らせねえとは、おかしいな」

「もしこつちへ来たら、電報で知らせてくれよ。札幌でも旭川でも、どつちでもいいよ」

「よし来た。札幌は図書館の方だな。旭川は博物館の方だな」

「風森はいい男だがね。思いつめると何をやり出すかわからないからね。それで困るんだよ」

「心配するこたないよ。奴は頭はよく働く男だからな。アイヌも今はおとなしくなつたさ。わるい事やる元氣のある奴も、いねえからな。なあ先生よ。それよか、俺は先生のことの方が、よっぽど心配さ。世の中は、先生の考えとは、逆に逆にと廻つて行くだからよ」

「エカシの仲間たちの中でも、僕を馬鹿にしてる者はいらね。嫌っている者もいるね。それはちつとも構わないんだよ。僕は馬鹿にされても嫌われても、やるだけのことはやるつもりだからね」

きまじめになつた時の博士の横顔は、瘦せて長細く、キリストに似ていると雪子と思う。しかしキリストは今の博士よりは、もっと力強く、もっと雄弁で、かつ未来を保証されていたのではなからうか。精神の王者になる、堂々たる路を歩いている者の權威が、博士にはなかった。

「何がほんもののアイヌかなんて、きめようとしたって無理な話さな」中年の客は、すねて、ふてくされている。「何がほんものの日本人か、それが第一、わかるわけもないものな」

発着所のベルは鳴りつづいている。起ち上つた博士に、老人は愛想よく言つた。

「アイヌのことも、アイヌのことだが、先生方のことも、ちつたあ考えた方がいいよ。早く嫁さんをもらいなよ。いつまでも独りでいるのはよくないこんだよ」

それが四十をなかば越した学者にとつて、古傷にさらわれる痛みになると、老人は承知していたのだらうか。二十代で結婚した池博士を、アイヌ女は裏切つていた。開拓者や商人が北海道に入りこんでから、シャモ男に裏切られたアイヌ女は数かきりが無い。和人たちが自分では裏切つたなどと、まっとうな感じを持たない前に、メノコたちは棄てられ、忘れられた。二十五歳で農學博士になつたためずらしい秀才、しかもアイヌを愛し得るとみずから信じ切つていた申し分のない夫の愛情を、若いメノコが思い切りよく踏みにじつた。当時としては不思議な異例である。痛快がつたのは、アイヌ族よりはむしろ、アイヌなど滅亡しようとして復活しようと問題にしていないう和人の男たちの方であつ

た。すでにその頃から池博士の善意は、苦勞を知らぬお坊ちゃんのひとりよがり、「よせばよいのに」と批判されていたのだ。博士に同情した和人の女性たちは、その身のほど知らぬアイヌ娘を、はなはだしく憎んだようだ。

雪子が博士の気の毒な離婚事件を、同業の画家から聴き知ったのは、つい一年半ばかり前のことである。つまり彼女が札幌に定住して、アイヌ風俗を専門に描きはじめた時だ。

「雪ちゃん、どう思う」と同業者に、他人の感情の先廻りをしたような質問をされても「へえ、そうなの」と答えるより仕方がなかった。自分以外の男女の情事がどうなろうと、それをあれこれ判断するひまなど、彼女にはなかった。男女のいざこさは、どんなに悲壮がったり面白がったりしたところで、要するにいざこざなのだ。裏切ったアイヌ女も、彼女とおなじ人間の雌メスなのだし、棄てられた池さんだって、かつて彼女を裏切った三人の男と、たいして違わぬ雄オスにすぎない。

雪子の北海道行きを決定させた十九歳の青年は、彼女を殴ったり蹴ったりした。今でも彼女はその青年を愛している。彼が「おめえは出ッ歯じゃなきゃ、いい女だがな」と批評した次の日に、雪子は前歯を五本、そっくり抜いても

らったのだ。それだけ忠義だとしても、役には立たなかった。

山岳から横すべりして米た雲が、湖面にさしかかると、急に勝手気ままにひろがりはじめた。そのため湖水の色かたちは、きびしくなり、活気ついた。

遊覧船には屋根もあり、ガラス窓もある。しかし底の浅い、きゃしゃな造りだった。湖心のあたりで機関が故障した。霧雨が水の面を暗くして、船はかなり揺れながら流れた。博士は雪子からはなれて、腰を下ろしていた。連れ立って旅行するあいだ、彼はいつも彼女に対してギコチなかつた。肉体を近寄せないようにした。池は雪子にとって親しみやすい年長者、重宝な案内人にすぎない。雪子は別だん、博士を「利用する」下心はなかった。だが結果において、自然とそんな形になった。霧雨は灰白色の霧と、ななめに吹きつける細い雨にわかれた。機関がとまってから、静けさが霧のように、二人ぎりの客の廻りに押し寄せた。

船底は、たよりない水音をたてた。船首になびいていた赤い小旗も静止して、黒みがかつた。故障はなかなかおらなかつた。二人の客のため、甘い声をはりあげて、湖の伝説を語りきかせた案内ガアルは、ただの娘にかえて、不安そうに沈黙した。船が別の場所へ連れて行ってくれるま

で、彼女には客にきかせることがなかった。

「これではマリモは、よく見えないだろうな」

「ふふ、これじゃね。だけどすぐ晴れるでしょ、きっと。

せっかく来てマリモが見えないじゃね」案内嬢は、すまなそうに、博士に言った。

「このひとは、マリモの絵が得意なんだよ」

「へえ、そうですか」案内ガアルは、カアディガンともジャンバアともつかぬ、黄色い上衣を着けた、化粧もしない女画家を羨ましそうに見つめた。會長の娘セトナと部落の青年マニベの悲恋物語を、日に何回となく唱えなければならぬ案内嬢にとって、旅づかれしている都会の女が、自由のきく身分に見えるにちがいがなかった。

「佐伯さんは、マリモが好きなの。よく飽きずに描くね」

「好きと言うわけじゃないけど。マリモの絵はよく売れるのよ」

「マリモと、それから熊の頭の骨かな。植物だとか骨だとか、そんなものが好きらしいな」

「なまけ者だもの。マリモや骨なら札幌にいても描けるでしょ。だからね」

「へえ、札幌にもマリモがあるんですか」と、案内嬢は無邪気におどろく。

「ううん。ここから持って帰ったのよ。金魚を入れる容器の中へ入れたいのよ」

健康ではちきれそうな山の娘にくらべ、佐伯雪子のうけこたえは、もの憂げでのろのろしていた。二十七にしては、皮膚の色もふけている。睫毛の長い大きな眼も、輝くことはほとんどなかった。九州女によく見うける、大まかでしつかりした顔だちだし、男好きのする恵まれた肉体なのに、全体として、万事をあきらめたとでも言った、投げやりな淋しさがあった。

「一年ばかり、もったけど。やっぱりダメね。七月になったら腐っちゃったわ。札幌ならもちそうなんだけど、無理なのね。マリみたいに弾力があるでしょ。それが中身がカスカスになって来てね。緑色じゃなくなって、焦げたように黒く茶色になって来るのよ」

「育成は無理なんだよ。金魚鉢なんかでイクセイしようとしたって、うまくいくわけないさ」

美しい湖の肌を、じらしながら見せつけるように、霧の幕はゆらめきながら、一枚ずつはがれはじめた。機関はおぼつかない音を立て、やがていらだたしげに鳴りひびいた。向う岸の林が、ゆっくりと近づいて来る。水際まで降りて来た林は、太い朽木を水中に横たえていた。溺死者の腕の

ように、水面に突き出して、鈍く光る長い枝もあった。林の裾は長年のあいだ、積もり積った枯葉と枯枝と苔で、踏めば必ず植物性の泥と化している。ほの暗い林の奥に、薪をあつめる人影がうごいた。ガラスをはめた桶で、水中をのぞく。うす濁りした水が、小さな泡を光らせてガラスの向う側を流れて行く。水底はまだ見えない。暗いうす緑色の水の層に、だんだん眼がなれてくる。やがて、水と見わけがたい暗緑色の球がおほろげながら、一つの形となつて眼に入る。球形の藻は、湖底におちつきもせず、水面に浮びあがりもしない。そしてその数はおびただしい。雪子がガラスの容器で養つたマリモは、新鮮なグリーンで美しかった。今、湖中に漂うマリモは、茶褐色に近い。光線の加減と水垢のため、色艶わるく不愛想に、見つけられるのを嫌うように沈んでいる。小さきさまざまな球は、上下に層をなしてつらなり合い、浮ぶなよ動くなよと、互に戒めあっているようだ。

——セトナは十六の春を迎え、いよいよ婿^{むこ}定めの日がきました。セトナはマニベという青年を愛していました。マニベは勇敢で気だてのよい青年でした。しかしセトナの花婿に選ばれたのは——「摩周湖から下ってくるバスの中でも、案内ガアルは歌うようにそう説明した。自分でもうつ

とりして、必ずこの物語が客たちの氣に入ると信じ切つたように。マニベ青年は、セトナの婿と定められた副酋長の息子と争つて、それを殺す。今はこれまでと、彼は丸木船を湖上にうかべる。日ごろ親しんでいた蘆笛を、この世の名残りに、こころゆくまで吹きならす。そして哀れにも湖中に身を投げる。愛する男の死を聴いたセトナには、もはや生きる望みも消えはてている。彼女もまた愛人のあとを慕つて、湖底に沈む。——そして阿寒おろしの吹きすさぶ夜には、セトナのむせび泣きの声に和して、マニベの悲しい蘆笛がきこえるのです。やがて阿寒湖には、恋する二人の心が一つになって、マリモが浮び漂うようになりました」おそらくマリモたちは、幾組かの愛し合った男女が身を投げるより前から、古く古くむらがって、この湖に棲息していたことだろう。おそらくはアイヌばかりでなく、原始人類の一人としてこの地帯に足をふみ入れない時代から、悲しい伝説や、せつない愛情や、丸木舟や蘆笛などと全く無関係に、自分たちだけの生を自由に営んできたのだらう。そして今は、天然記念物として湖の一隅に「保存」されて、やつと命脈を保っている……。保存され、育成され、身におほえない伝説のタネにされてわずかに生き残ることが、マリモたちにとって幸福なのだろうか。